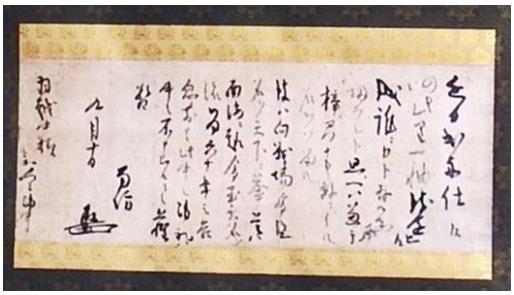
●春日部市民文化講座（第 29 回）　「高山右近が遺(のこ)した茶の湯の賜物(たまもの)」

◆日時：2019 年 2 月 6 日(水)　11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■高山右近が残した茶の湯の賜物

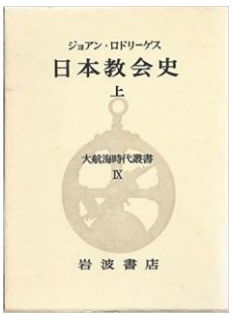
今日、ぼくがここでお話しするテーマは**「高山右近が遺した茶の湯の賜物」**です。このテーマについては、ぼくが 40 年以上にわたって考えていることなのです。実は、高山右近が遺したものがあるかというと、何も遺っていないのですよ。千利休といったら沢山の物が遺されていますし、豊臣秀吉も織田信長も沢山の物が遺されていますが、高山右近というと無いのですよ。実は「賜物」というのは、教会の中心的な教義を表す言葉です。実は「恵み」という言葉も教会用語なのですが、**「恵み」はギリシア語で「カリス」**と言い「カリスマ」の語源でもあります。「カリスマ」は、預言者や英雄など超自然的または常人を超える資質のことや人のことを指しますが、神が与えた「恵み」を人が受け止めた時に「カリスマ」になるのですね。その**「カリスマ」が「賜物」**なのです。能力のある人を指しますし、神が与えたものをしっかりと主体的に受け止めた時に、その人の能力・賜物・カリスマとして発揮することができるのです。そういう意味で高山右近という人は、日本人キリスト者の中で最高の人だと思います。敢えて遺してくれたというのは、今、皆さんの前にあるこの書状**「日本訣別の書」**だけです。



「近々、出航いたすことになりました。ところで、このたび一軸の掛物をさしあげます。どなたにさしあげようかと思案しましたが、やはりあなた様にこそふさわしいもの、私のほんの志ばかりでございます。帰らじと思えば兼ねて梓弓無き数にいる名おぞ留むる。彼（楠正成）は戦場に向かい、戦死して天下に名を挙げました。是（私）は、今南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです。いかがなものでしょうか。六十年来の苦もなんのその、いまこそ、ここに別れがやって参りました。先般来の御こころ尽くしのお礼は、筆舌につくす事は出来ません。恐れながら申し上げます。九月十日　南坊等伯　羽越中様（細川忠興）　参人々御中」【永青文庫蔵】

これは細川家が 400 年にわたり遺してくれたものです。しかも、何で今頃という時になって「永青文庫の中にありました」と言って出てきたのです。ぼくは細川護熙さんに「何で今まで出さなかったのですか」と尋ねたことがあるのですが、その時「南坊と書いてあるから南方宗啓（なんぼうそうけい、戦国時代の僧、千利休の高弟とされる茶人）のことだと思っていたと学芸員から聞かされていた」と言うのです。でも、それは嘘でしかないのですよ。牧師の髙橋が聞くから辻褄合わせの話をしているだけなのですよ。実は、高山右近もそうですし、キリスト教徒は嫌われていたのです。だから、高山右近の所持していた物とか文章とかそういった物がないのです。彼が利休の弟子としてどんな道具を使っていたのとか、そういう物が一切無いのです。全て歴史の中から消されてきたのです。ですから、全部消されてきているからこそ、高山右近については無いのだけれども、ぼくはぼくなりに高山右近が遺してくれたものは何だろうか、茶の湯を通して遺してくれたものは何だろうかとずっと考えてきた時に、今日お話しすることがぼくの心の中に湧き上がってきて、「あっ、これだ」というものを今日のテーマとしてお話しさせていただきます。

■ジョアン・ロドリーゲスによる証言



ジョアン・ロドリーゲス（1561-1633 年）は 1577 年（天正 5 年）に来日したポルトガル人のイエズス会司祭で、言語の天才で熟達した日本語で説教をしましたし、日本語の文法書『日本語文典』『日本語小文典』と日本における教会の歴史をまとめた**『日本教会史』**を著しています。また、ロドリーゲスは、そんな語学に精通した人ですから神学校でラテン語を教え、豊臣秀吉や徳川家康との親しい関係も持ち、外交折衝通訳をしていました。

「高山ジュストはこの芸道で日本における第一人者であり、その様に厚く尊敬されていて、この道に身を投じてその目的を真実に貫く者には、数寄が道徳と隠遁のために大きな助けとなると分かった、とよく言っていたが、我々もそれを時折彼から聞いたのである。それゆえ、デウスにすがるために一つの肖像をかの小家に置いてそこに閉じこもったが、そこでは彼の身につけていた習慣によって、デウスにすがるために落ち着いて隠退することができたと語っていた」

「高山ジュスト」とは、右近の洗礼名で**「真実」**という意味の言葉です。「この芸道」というのは茶の湯のことです。大切なのは、**「『この道に身を投じてその目的を真実に貫く者には、数寄が道徳と隠遁のために大きな助けとなると分かった』**とよく言っていた」と書いてあるのは、ロドリーゲスが高山右近から直接聞いていたということなのです。さらに「デウスにすがるために落ち着いて隠退することができた」というのです。**「隠退」**というのは、籠もることです。

高山右近の場合は、大名として戦国武将としての立ち位置から一旦退いて、静かに自分を見つめ直して、考えをまとめる、それは自分が信じているデウス、神様からの教えを受け止めて全人格的に均衡のとれた判断力を養うという言葉の意味が、この隠退にはあります。これは今のカソリック教会では**「霊操（れいそう）」**と言います。これはイグナチオ・デ・ロヨラというイエズス会を始めた人の霊性修行です。この修行は、高山右近の時に既に翻訳されていました。そのロヨラの**「霊操」の手引きを見ながら、高山右近は小家・茶室に籠もってマリア像か何かを飾って、茶を点てて自分で飲みながら戦国時代を見ていたのです。**

■ロドリーゲスの証言から高山右近を知る

このロドリーゲスの証言の重要さというのは、高山右近が自分の習慣として茶室に籠もって、肖像というのはマリア像かキリストの十字架に架けられた姿か、十字架そのものであったかも知れませんが、そういう物を床か壁に飾って、そういう処に籠もって逃れて、お茶を自ら点てて飲む。この時のお茶は間違いなく濃茶ですよ。やがてお薄を飲むというようなことを毎日のようにしていたのですね。それが、**茶の湯を通しての高山右近の信仰と自分の人格を磨きあげる修道・訓練だったのです**ね。高山右近という人は、父親から高槻城を譲り受けて畿内の武将として守り抜き、自らを鍛えていたわけです。それが鍛えていた場所が斬り合いや剣術の場ではなくて、小さな茶室で自らお茶を練り、点てて飲むという茶の湯の修行だったわけです。そういうことをこのロドリーゲスの証言からぼくは聞き取っているのです。高山右近がぼくに遺してくれた賜物というのは、目に見えない、体で感じるものなのですね。彼にとって茶の湯は娯楽では無いのです。当時の心あるお茶人たちは「おれは茶の湯をしなければ生きていけない」というほどの感覚を持っていたのですよ。これはいろいろなお茶人たちの証言として沢山あります。

高山右近が物質として遺してくれたものは、この書状です。右近が使ったという茶入があるのですけれども、それは名古屋の徳川美術館が所蔵しているものがありますが、「高山左近所持」とされています。

■高山右近の「侘びとは温もり」

申し上げたいことは、ロドリーゲスが来日した天正 5 年（1577 年）に高山右近が領主をしていた高槻では、2 万 5 千人の領民の 7 割の 1 万 7 千人が洗礼を受けているのです。凄いことですよね。これは誇大では無く、カソリック教会にしっかりとした記録が残っているのです。高槻のほとんどの人たちは城主による強制では無く、領民たちがこぞってキリスト教徒になったのです。このことと高山右近の「霊操」、そして彼が育んできた「侘茶の真髄」とは何かというと、それは何かというと**「侘びとは温もり」**です。ぼくは牧師という仕事柄、今死に逝く人と出会うということが多いのですよ。そういう人の傍に行って手を取ると、その方の温もりを感じるのです。皆さん、これを「賜物」というのです。**「恵み」が私たちの処に届いた時に、いまわの際であっても、そこに命があるということが分かるのです**。命とはそういうものなのです。命とは「温もり」なのです。その反対の死は「温もりが無くなること」なのです。今、ぼくは「侘び」の話をしています。「侘びとは生きることであり、死ぬことであり、死んだ後に温もりを回復すること」でもあるのです。高山右近がぼくに届けてくれた「侘茶の真髄」は、自分たちは去って行って死ぬよ、この命を天に任せて名を流すよ、高山右近の名なんて直ぐに忘れてしまうでしょう、「南坊」という号も忘れられてしまうでしょう。でも、ぼくが死んだ後は、神様の哀れみと温もりの中にあるんだぜ、と高山右近はそう言って死んでいるのです。自分が死ぬのは分かっているのだけれど家族に言わないのは、家族に余計な心配をさせるのが嫌だからだと言っているのです。この書状の 9 月 10 日で出航が 10 月 6・7 日ですが、これは旧暦ですから新暦で言えば 11 月頃です。1614 年の 11 月に家康のキリスト教禁教令によって、宣教師たちと一緒にフィリピン・マニラに国外追放されるのです。そして、マニラに着いて 40 日後に息を引き取るのです。1615 年ですから、今からちょうど 404 年前ですね。実は 2 月 3 日に亡くなっているのです。

■感性を大切にする日本文化

感性は大切です。花の生け方、茶席の設え、茶の入れ方によっても違います。曖昧さの中でどのように感性を磨いて、そのお客様の感性に近づいてぴったし美味しいと言っていただける茶の量、湯の量などを総合的に表現できる者が茶人です。高山右近という人はそういうことができる人だったのですよ。ですから、高山右近の茶の湯というのは自らの温もりを求め、温もりを求めてくる人を裏切ることのない「温もりという豊かさ」でした。もう一度繰り返しますが、「侘びとは温もり」です。千利休が遺した茶杓をことごとく見て調べた西山先生は**「千利休の茶杓は、樋が節を貫いて通っているよね、これは十字架だよ」**と仰るのです。そして右近の茶杓**「御坊へ　花十」を「花クルスって読めるよね」**と仰っているのです。こうしたことからも、利休さんの侘茶を受け継いだのは高山右近が一番だと思いますね。**「侘びとは温もりであり、生きること。死んだら温もりを失うことである」**という侘茶の真髄を誰よりも理解していたのが右近ですよ。

髙橋先生の言葉にはいつも「温もり」があります。私たちを包み込むだけでなく、元気づけてくれる温もりですね。